

【背景と目的】

- ◆継続的な口腔ケアは、進行が速と言われる認知症患者の口腔機能の衰えに対し効果がある。
- ◆口腔機能の衰えが認知症の誘因であることを示唆する疫学研究



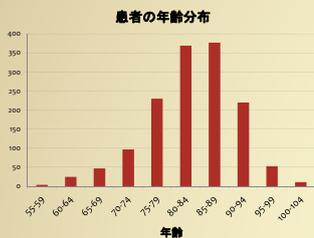
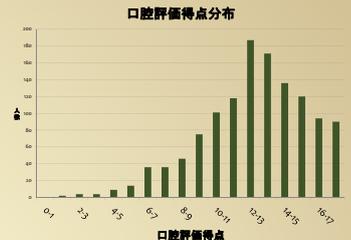
口腔ケアは、認知症の進行を遅らせることができるか？

【対象と方法】

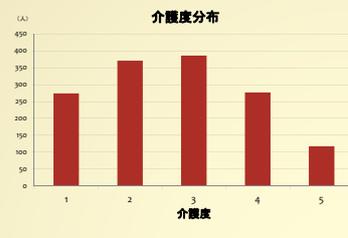
対象: 東京都、埼玉県、神奈川県グループホーム82施設において、継続的な口腔ケアを受けている認知症患者1434名
評価軸: 年齢、介護度（認知症自立度とおおよそ対応？）、口腔ケア期間、残存歯数、口腔内評価（※）
調査期間: 平成22年8月～23年6月

※口腔内評価: 歯科衛生士による客観評価を点数化。合計0～18点。

口臭		自発的な口腔清掃習慣		むせ		食事の食べこぼし		表情の豊かさ		咬合力(右)		咬合力(左)		歯や義歯の汚れ		舌の汚れ		ブクブクうがい	
選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点
ない	2	ある	2	ない	2	ない	2	豊富	2	強い	1	強い	1	ない	2	ない	2	できる	2
弱い	1	多少ある	1	多少ある	1	多少ある	1	普通	1	弱い	0.5	弱い	0.5	ある	1	ある	1	やや不十分	1
強い	0	ない	0	ある	0	多い	0	乏しい	0	無し	0	無し	0	多い	0	多い	0	不十分	0



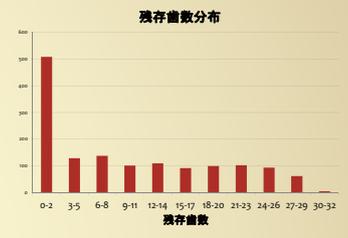
83.2±7.6歳
 (※平均±標準偏差、以下同)



2.7±1.2



887±633日
 (≒2.4±1.7年)



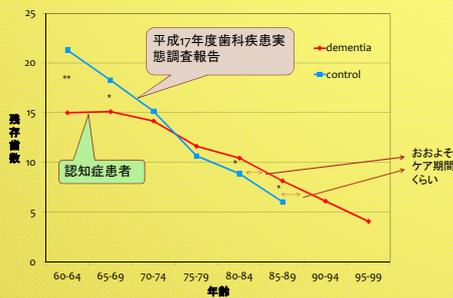
9.6±9.3本

【結果と考察】

◆口腔評価得点と介護度の関係

口腔評価得点と介護度は中程度の負の相関($r=-0.43$) → 口腔評価が高いと介護度が低く、口腔評価が低いと介護度が高くなる傾向。

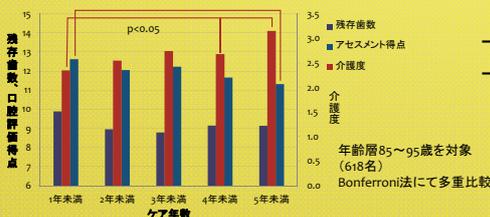
◆残存歯数と年齢の関係



厚生省による疫学調査(歯科疾患実態調査報告)の一般人を対照群として残存歯数と比較。

- 認知症であるにも関わらず、75歳以上では残存歯数が対照群を上回った
- 口腔ケアが有効に機能することで、残存歯が減少することなく保たれていると考えられた。

◆ケア年数に対する、残存歯数、口腔評価得点、介護度



- ケア年数が長い程、介護度は上がり、口腔評価は下がる傾向。
- 残存歯数は年数が経っても保たれている(口腔ケアが機能)

→ 口腔評価を維持することで介護度の進行を遅らせることができるのではないかと

【まとめ】

- ◆継続的口腔ケアを受けている認知症患者の残存歯数は良く保たれている。→口腔ケアが有効に機能している
- ◆介護度と口腔評価は負の相関にあり、実際ケア年数を経ると介護度が上がり、口腔評価は下がる傾向
 → 口腔ケアを継続し、口腔評価を維持・向上していくことで認知症の進行を遅らせることができるかもしれない。